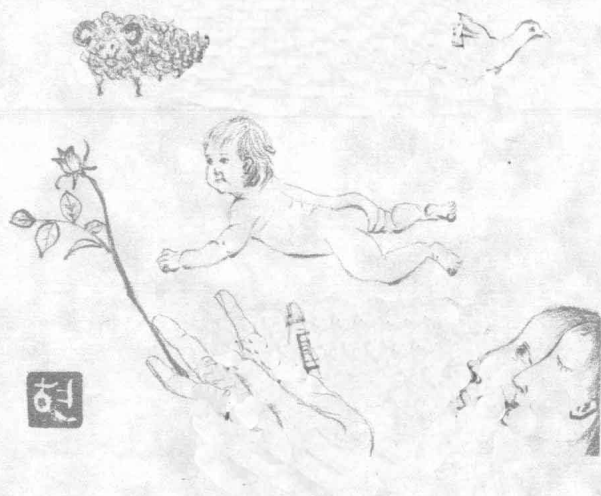


ベルリン日録

小田 実



ベルリン日録



小田 実

講談社

ベルリン日録 にちろく

一九八七年五月二十日 第一刷発行

著者——小田 実

© Makoto Oda 1987, Printed in Japan.



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—四三—二三（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ベルリン
日録

ベルリン日録・目次

「居住中の芸術家」 7

二人のドイツ人 23

「壁」と「昭和のモダニズム」 39

「戦後四十年」の「私の誕生日」 55

「ブッドワイザー」と「バッドワイザー」 71

「病院」の窓から 86

「子供代々」の社会での出産 103

個人として生まれた子供 120

オモニの西ベルリン、ヨーロッパ 136

アメとムチのドイツ、ムチだけの日本 153

古い大学と古いお城 169

雪の夕暮の風景 185

赤ん坊の「文革」 202

「スパイのおじちゃん」 218

戦後四十年、どうして今まで…… 234

過去、現在、そして、未来 250

あとがき 271

装画・挿絵

装
幀

玄 順恵

熊谷博人

「居住中の芸術家」

いわゆる「先進国」には、よく「学術交流基金」というのがある。政府、あるいは政府の外廓団体が金を出して外国の学者や学生を招いたり、自分の国の学者や学生を外国に送り出したりする。西ドイツにもそういうのがあって、ドイツ学術交流基金 (Deutscher Akademischer Austauschdienst) 略称「DAAD」というのがそれだが、この「DAAD」という機関は、本来は大学の学生や大学院生を外国から招^よんで勉強させたり、外国へ送って修業させるというのが目的のものだ。ただ全体としてはそうだが、「DAAD」の西ベルリン支部だけが、外国から芸術家を招んだり、外国へ送ったりするというような乙なことを長年やって来ている。おかげで西ベルリン支部はボンに本部のある本体からはおかしげな連中と

して見られているそうだが、そう西ベルリン支部の連中は言うのだが、その連中が外国から招んだ芸術家は、「居住中の芸術家」ということになって、三ヵ月、半年、一年と期間はいろいろあるらしいが、とにかくそのあいだ、その芸術家は何をするのかと言うと、まず、文字通り西ベルリンに「居住」する。もちろん、そこから旅してどこへ行ってもよろしいが、いや、そういうぐあいに私は解釈することにしたが、「居住」して仕事をするか、もっぱらヒルネをするかは、彼、彼女の自由だ。とにかく最小限の義務は「居住」することであって、それ以外には何んの拘束、義務、責任もない。まことにありがたいことである、この「居住」という義務は。――

そのありがたい義務が、一年の期間で、私のところに降って来た。もちろんかげで努力した人があつてのことだが（一年に一度、「居住中の芸術家」選定の委員会が開かれて、彼、彼女を決める。そういうしくみになっているらしいが、くわしいことは知らない）、こういう義務はよろしく行使したほうがよろしい。それでありがたく招待を受けることにした。

「居住中の芸術家」の「芸術」には、文学、音楽、絵画、映画と四つの種類があつて、音楽、絵画はすでに日本人で「居住中の芸術家」になった人は何人かいるらしいが、文学は私が最初だそう。すべて最初というのは気持ちのよいものである。「じゃあ、行ってみようか」――と私は言い、私の「人生の同行者」（これは私流の言い方で、つまり、つれあいのこと

だ）はうなずいた。

それにこのところ、外国と言え、去年は半年中国にいたりして、「第三世界」の国々ばかり行っている。こちらでひとつ「西洋」でくらし、その「現場」でじっくり考えてみるのもわるくない。第一、考えてみると、私はヨーロッパへは何度も行ったことがあるが、「居住」したことはないのだ。

「居住」先がドイツというのも、私の気持が動いたひとつの理由だ。私はドイツ語はまったくと言っていいほどできないし、ドイツ文学にもドイツ文化にもこれもまたまったくと言っていいほど無縁にくらして来た人間だが、ただ、私の子供のころ、「西洋」と言えば、まず、ドイツだった。「ベルリン」という首都の名前を知っていただけではない、「ウンター・デ・ン・リンデン」というような目抜きの大通りの名前を私は知っていた。「ニューヨーク」は知っていても、「五番街」^{ヒフス・アベニュー}は知らなかった私が、である。あるいは、「パリ」は知っていても、私は、たぶん、「シャンゼリゼ」を知らなかったのではないか。なぜ、そんなにもドイツが私にとって近い存在であったかは、私がそのころよく聞き知っていた三人のドイツ人の名前をあげてみれば、たちどころにはつきりするだろう。ヒトラー、ゲーリング、ゲッベルス。――

つまり、私にとって、ドイツはゲーテやベートーベンの国であるまえに、まず彼ら三人の

国だった。ということ、ドイツのいまわしい過去が直接に私自身の日本のいまわしい過去に結びついて来ることになる。そして、その過去のはての敗戦。敗戦をまえにしての徹底的な破壊。私は空襲の体験者だが（私は大阪にいた）、そのころ、私はベルリンの空襲のことも知っていた。ベルリンの最後の市街戦のことも聞き知っていた。もちろん、ベルリンが廃墟となったことも。――

* * *

一九八五年六月十五日（土） 小雨、のち、曇り。

小雨降るなかを、アムステルダム經由で西ベルリン、テーゲル空港に着いた。「D A A D」からの男、友人のK君夫人、さらにベルリン自由大学に勤めるF君も来て、すぐそのまま彼らの車で、「D A A D」が用意してくれたアパートへ来た。住所はクロイツベルク区ホルン通り三番地。

クロイツベルク区は、今は東ベルリンとなった都心に近くて、その昔は裕福な人たちが住んだところだが、今はいささか落ちぶれて、若い学生と外国人労働者という裕福に関係のない人たちが住む地区だ。外国人労働者のなかで多いのはトルコ人で、例の「ガスト・アルバイター」という存在だが、おかげで、この地区を主として通る地下鉄の路線のことを「イス

「居住中の芸術家」



7. 16. '28

タンブル特急」と人は言う。二、三年前には、空いている住宅を占拠して勝手に住み込むという運動がもっともさかんだったのはこの地区で、そのころには、「クロイツベルク共和国」と書いた標識を運動の連中はこの地区に入る道路におっ立てていた。とにかく、政治的には「左翼」が多く居住していて、いろんなその種の催しごとでも事件も多くて、ベルリンでもっとも面白いところだ——というようなことは、車のなかでもアパートに着いてからでも聞いた話。その面白いところに、「居住中の芸術家」はこれから「居住」するわけか。「オダさん、いいところに住みますね」とK君夫人、さかんに言う。

アパートは昔ながらの薄汚れた五階建ての建物の四階。建ってから百五十年は経っているだろうという。古い建物だから、天井が高くて、日本のアパートはどこに住んでも天井が低くて、いつも頭をおさえつけられているみたいだったから、これはありがたいが、少々高すぎる。これで三メートル六十。もう一級高いのは、これは大金持のアパート（それこそ、「マンション」というものだろう）の場合だが、四メートルあるという。三メートル六十でも高すぎる感じで、扉のいちばん上のはしまでも、跳び上って見たがとどかない。私はこれで日本人としては、かなり長身のほうなのである。

天井の高いのはありがたいが、こういう古い建物にはエレベーターがない。たいした荷物ではないが、とにかく一年間くらすつもりで持って来た荷物である。当然のこと本もかなり

持って来たので重い。それを四階（この数え方は日本流の数え方で、ドイツ式に言うとは三階になる）までみなしてかつぎ上げる。ここの連中は子供のときからこういう生活に慣れているからたいして苦にしていけないというが、こういう生活にまったく慣れていない「人生の同行者」は呆れはてた顔をする。昔は「西洋」へ行くことがすなわち「近代」に触れることであつたのが、今は「昔」に触れることになっているのか。台所の設備にしる何んにしろ、日本のほうが便利で「近代的」にできている。階段は木製の階段。天井には何やら絵らしきものがある。かなりはげっちょろけで、図柄はよく判らぬ。日本でなら、五階建ての建物に木製の階段は消防署が許さないのではないか。この階段、傾斜がゆるいのがありがたい。万事大まかで、ゆったりしている。

こういうのがこの国でも若い芸術家のあいだなどではやっているのか。古い、昔ながらの建物に住んで、なかを「モダン」に、また安上りに改造するのだ。ニューヨークで、ひとこの芸術家たちが下町の「倉庫^{ロフト}」を手に入れて、なかを自分好みに改造して住んでいた。「D A A D」が用意してくれたクロイツベルク区の私のアパートもそういう種類のものです、大きなランドウめいた部屋三つのうち二つには麻の敷物を敷いて、その上に低いソファ、低い椅子、低いテーブルをおいて、坐ってくらせるようにしてある。ベッドもドイツ式に昔の古風のがそなえつけてあるのかと思つたら、そうではなかった。ぶあついマットレスまがいの

が、すなわち、私たちのベッドであった。仕事用の机はさすがに「D A A D」が「居住中の芸術家」のために用意しているアパートだけあって、三つ、大きながある。「D A A D」はこういうアパートをいくつも持っていて、招待した「居住中の芸術家」をそのどこかに住まわせているのだが、私たちのところの前住者はベルーの彫刻家だった。何冊か英語の本をおいて行ってくれた。それと、スーパー・マーケットでの買物のつり銭を貯め込んだものらしい小銭の山。

どこにも出られないうちに夜になった。夜と言っても、九時をすぎてもまだ十分に明るい。これから西ドイツでは連休で、三日、休日がつづく。つまり、どの店も休みになるというわけだ。K君夫人が気をきかせて冷蔵庫に入れておいてくれた三日分の食料品を使って、適当に夕食を料理して食べる。「夕食」と言っても夜中の食事である。台所は万事勝手がちがう。マッチを擦ってガスをつける生活に逆戻り、それはよいが前住者が残して行ってくれたマッチがもう残り少ない。こういうとき、タバコをすわない私は不便である。これから三日間、店がすべてお休みとなると、まず、マッチが問題だ。ベルリンに着いた早々、この奇妙なことに頭を悩ますとは意外のことである。苦笑する。

ただ、ミソ、ショウ油、すべてこの国の「国産」のものがあって、助かる。